

道は、
続いている
安東奈穂美

一、人生の始まり

母の胎内に私が宿った時、母はまだ二十歳という若さだった。京都出身と聞いているが、その頃は父と大阪でアパート暮らしをしていた。私の祖父にあたる母の父は戦死し、その後、実母が家を出たため、親戚に預けられて育ったそうである。親元での出産が主流の時代に不安が大きかったと思われる。しかし、父の勤め先の社長夫人が何かと世話をし、近所の人達も親戚以上の付き合いをしてくれたようで、産後はすぐにアパートに戻って生活を始めたようだ。

父は、親戚の会社を手伝うために、一五歳で新潟から大阪に出たそうだ。一時的に働くつもりが、結局、六二歳でこの世を去るまでその会社に勤め続けた。口数は少ないが、はじめで同僚からの信頼も厚かったようである。

私の物心がついた頃には弟がいた。一歳七か月違いだが、周囲からはお姉ちゃん扱いされていたらしく、幼いながら、自分は姉なのだ、との自覚があった。母が買い物に行く間、よく二人で遊びながら留守番をした。

昭和四十年代は、まだ幼稚園に行かない子供や、一年だけ通園する子供もいた。アパートから十分くらいの所にお寺が経営する幼稚園があり、近所の子供達はたいていその園に通っていた。自分も同じところに行くのだろう、と漠然と思っていた。

しかし、母は隣町のキリスト教会附属の幼稚園に私を入れたのである。一駅とはいえ、わざわざ電車に乗って、である。

母の話では、たまたまお寺の幼稚園の先生が子供達を引率しているところを見たら、安全に対する配慮がなかったように見えたらしい。率直に

「あんな園にはやれん」

と言っていた。ほんの一瞬の様子を見て、ずいぶん短絡的に決めたものだと思っていた。長い間、母の言葉をそのまま受け取っていた。

しかし、今振り返ると違う印象を抱くのだ。

母は、少なくとも教会附属の園を見学に行っただろう。一人で行ったのだろうか。教会の方が親切に礼拝堂を案内してくださっただろうか。

下の子供を連れて送迎するとしても通わせたい、と願うほど、惹かれるものがあつたのではないだろうか。子供を通して自分もその雰囲気に触れたい、と。

幸い、私は登園を渋ることもなく機嫌よく通い始めたようである。幼稚園の通園鞆には子供用の定期券がぶら下げてあつたと記憶している。それが誇らしいような気持ちだった。そして、毎日の礼拝ですぐに主の祈りを覚え、子ども讃美歌も覚え、得意げに家で披露していた。母は、きつと今までに味わったことのない穏やかな喜びを感じていたのだと思う。

二、Kくんのこと

小学二年生の時、同じ組にKくんがいた。背が高く、色黒で目がくりつとした男の子だった。

今思えば、Kくんには知的障害があったのかもしれない。高めの声で、話し方が幼い印象だった。

ある日、母が用事で教室に来たことがあった。母が私を探していたのだろう。Kくんは、「ここに、(バッジを)つけてるお姉ちゃん？」

と言っていた、と後で母から聞いた。当時、私は学級委員で、名札にバッジをつけていた。Kくんは、私の名前を呼んだのか、手を引っ張って知らせようとしたのかは思い出せないが、しっかりと私を見つめる彼の表情が心に残っている。

学級で席替えをする時、担任の先生が

「Kくんの隣にすわってもいい人」

と、教卓から全員に呼びかけた。私は、すわってもいいと思ったのだが、なぜか手を挙げられなかった。手を挙げた子供は一人もいなかった。

私は、参観日で大人がたくさんいても、物怖じせず自分の意見を言える子供だった。

先生に当てられて、

「今、考えているところですよ」

と答え、母親達が小さく笑いをもらしていたことがある。

しかし、その席替えの時は、手を上げることができなかったのだ。Kくんが寂しそうな顔をしていた。なぜ、Kくんの隣でいいと思っっているのに、意思表示をできなかったのか。私は何を恐れていたのか。その日から、胸にもやもやを抱え、忘れられない出来事になった。

三年生では組替えがあり、Kくんとは違う組になった。夏休みよりも前だったと思うが、Kくんのお父さんが交通事故で亡くなったらしいと聞いた。

泣きながら廊下を歩くKくんの姿を見かけた。私は何もできなかった。

しばらくして、Kくんは転校した。

今、あの席替えの時間に戻れるなら、「はい、Kくんの隣に座ります」と言いたい。

泣いているKくんに近づいて、そっと肩に手をおくとか、名前を呼ぶとか、何もできないけど、Kくんの味方だよ、と伝えたい。

大人になった今は、時々思い出して祈っているよ。

神様が、どんな時もKくんを守ってくださいますように、と。

三、思春期と信仰の芽生え

小学四年生頃までは、自分本位であまり人の気持ちを考えることもなく過ごしていた。五年生に進級して誕生日を迎えた頃からだろうか、同級生と自分になじまないような気持ちになったり、家庭でも何となく浮いていて孤立感を感じたりするようになった。周囲からはそんなふうに見えていなかったと思うが、私の心は少しずつ大人への過渡期に入っていたのだろう。

幼い頃は人見知りをして、自分の気持ちを素直に伝えることが苦手だった。反面、思ったことをとつさに口にもすることも多く、相手が傷つくことも言った。なぜ、そんなに無神経だったのか、後々まで後悔するような出来事もあった。

中学校は、隣の区域の小学校と一緒に、新たな出会いがあった。ある友人が、自分は教会に行っていて、おもしろい先生がいる、と話してくれた。当時、日曜の午前中はただテレビを見ているだけだったので友人と一緒に電車に乗って隣の市まで出かけてみた。

その教会は坂の上であり、木を生かした落ち着いた色合いで自然にその雰囲気の中に入っていた。親しみやすい若い男性の先生、顔立ちの美しい女性の先生、アメリカ人と思われる優しい声の先生が迎えてくれた。初めは友人と一緒になければ行けなかったが、そ

のうち一人でも通えるようになった。教会附属の幼稚園の同窓生もいた。

中学二年生の夏、大阪府北部のキャンプ場でもたれるバイブルキャンプに参加した。ゲームをしたり、プールに行ったり賑やかに過ごした。夜に聖書のお話があった。

伝道師だという女性の先生が、静かに語り始めた。私達は、皆、罪をもっているという。具体例として親への反抗があった。いつも反抗的な態度をとっていたので、「そういうあなたではないですか」その一言が胸に突き刺さった。そうだ、罪人とは私だ、と心が激しく揺さぶられた。続けて、イエスさまはあなたの罪を赦すために十字架にかかった、と話された。圧倒的な神の愛が私を覆いつくした。

私は、涙をボロボロ流しながら、イエスさま、ごめんなさい、と心の中で何度も言った。メッセージを語ってくださった先生の顔と夜の集会場の光景が心に焼き付いている。

それから三〇年後、韓国人の先生から、救われた時、どんな気持ちでしたか、聞かれ、「爆発です」

と答えた。それが当時の心情を表すのにピッタリだった。

いつかは洗礼を受けよう、と思っていたが、それがいつかはわからなかった。しかし、神は私の心をとらえ、翌年のクリスマスに洗礼を受ける決心をした。またしても涙でぐしやぐしやになりながら、一五歳のクリスマス、私はクリスチャンになった。

四、歓喜と悲哀

親の反対を押し切って憧れのミッションスクールに入学した。正門を入ると手入れの行き届いた庭があり、正面には、日々礼拝がささげられ、式典でも用いられるチャペルがある。英語科での厳しい学びと、それ以上に苛烈な剣道部の活動で日々が過ぎていった。

日曜日は嬉々として教会に通っていた。夏には、兵庫県の幾つもの教会の高校生が集まる、三泊四日のキャンプに参加した。

中でも高校二年生の夏は特別だった。「神の栄光のために」というテーマで、講師の語る聖書の話が特に胸に響いた。この聖句で一生生きていこう、と心に決めた。キャンプファイヤーでは、さらに心が揺り動かされ、グループの先生と泣きながら祈った。家に帰ってから、特に反抗していた母親に赦しを請うた。

高校三年生の秋、珍しく母が体調を崩している様子だった。私が起きた時にはいつも忙しく動いているのに、寝床で背中を丸めるように座っていることもあった。

往診に来てもらった、かかりつけの医師の助言で決心がついたらしく、

「おかあちゃん、入院するわ」

と言い、親しい人に電話をかけていた。救急車には自分で乗り込んだ。その日は、たまた

ま父が家にいて、母と病院に行った。私も洗濯をしてから病院に駆け付けた。

母の容態は急変していた。

「急に苦しみだしたんや」

と父が言った。それまでに見たことのない姿だった。とても苦しそうで、しきりに水をほしがるのが、あまり飲ませてはいけないようだった。その病院ではもう手を尽くせないらしく、再び救急車で別の病院に行くことになった。私も救急車に乗った。

「みず、みず」

悲鳴に近い母の叫びだった。病院について間もなく、さらに事態が悪化したようで、病室があわただしくなった。医師が心臓マッサージをしている。しかし、母は息を引き取った。直接の死因は尿毒症だった。

「なんで、わしをおいて逝ったんや」

ふだん寡黙な父が母にすがりついていた。母は、三九歳の若さだった。

その日、剣道の練習試合に出かけていた弟がようやく病院に着いた。私はかける言葉がなかった。

残された三人は、肩を寄せ合って静かに暮らし始めた。

五、商社と幼稚園で働く

家庭の事情で進学希望を断念し、洋服縫製資材を取り扱う商社に就職した。初めて「鉦」(ポタン)という漢字があることを知った。

私は商品本部で事務をした。仕入先からの伝票を、担当部署に社内出庫という形で回すための伝票を書く。また、支店からの商品注文を受ける。電話やファックスを受け、これも社内出庫伝票に記載する。夕方、もう運送便が出る、という頃になって、頼む、今日の便に載せてくれ、と電話が入り、事務員は急いで倉庫担当と配送担当に伝え、運送会社に待ってもらってなんとか出荷、ということも多かった。

家族的でみんな優しいかった。ただ、社員には専務以下、ある新興宗教の信者が多く、特にキリスト教は敵視されているような印象を受けた。上司から食事に誘われ、和やかに会話している途中からキリスト教批判のようなことを言われることがあったが、上司が納得するようなことは言えなかった。同僚の家に遊びに行った時も、集会に連れて行かれた。車座になって、その宗教を信心したので家が建った話を聞いた。そういう問題かな、と思っただが、その時もうまく意見は言えなかった。しかし、母が突然亡くなった時と同様、神様はいる、という確信だけは消えなかった。

三年後、ようやく短大保育科に進学できた。二年間で幼稚園教諭と保母（保育士）免許を取るため専門科目が多く、文学や心理学などをもう少し学びたいと思っても半期で次の科目に変わるのが残念だった。しかし、学外でキリスト者学生会の活動に参加し、聖書を学んだり他大学の学生との交流もあつたりして充実した二年間だった。

二度目の就職先は私立の幼稚園、四歳児の担任になった。入園式も終わった新学期初日、園児が間違いなくそれぞれのバスに乗れるように並ばせるだけで時間が過ぎ、何も楽しいことをしなかったのか、と主任に呆れられた。

楽しく充実した活動にするため、試行錯誤の連続だった。自分には向いていないのでは、と悩み、こちらが登園拒否になりそうだった。歌が好きだったので、せめて歌だけは楽しく歌えるようにと願った。子どもたちの歌声にいつも励まされていた。

ある時から、園児が登園する前に保育室で神の祝福があるように祈ることにした。神の守りなしには一瞬たりとも前に進めないのだ。

夏の宿泊保育、六甲山のキャンプ場でオリエンテーリングをした時のこと。足元の悪い道で、ある男の子が振り返り、

「先生、あぶないで」

真摯なまなざしで発せられた一言は、彼の優しさを心の隅々にまで届けてくれた。

六、子供達

二六歳で結婚に導かれ、三人の子供を与えられた。個性は三人三様である。

まず長女。豊かな感受性と創造性をもつ。そのセンスは、後に自身や妹の結婚式の装飾でも生かされた。小学二年生で弟が生まれた時は、洗濯物を干して登校した。マイペースだが頼れる姉である。

中学入学時に隣の学区に転居、友人がいない所で中学校生活を始めた。色々な性格や考え方の同級生と出会い、初めは戸惑ったが、新たな友人もできた。吹奏楽部ではパーカッションを担当、合奏の醍醐味も味わった。

ずっと教会に通い、中高科の礼拝にも出ていた。三歳からレッスンしていたリトミックの教室と共に、自分らしくいられる場所だった。

高校時代に体調を崩して学校を休みがちになり、葛藤の中で日々を過ごした経験もある。様々な経験がつながって、彼女らしい実を結んでいくと確信している。

次女。一歳半くらいまでは言葉らしい言葉を言わず、今のようなおしゃべりになるとは想像できなかった。抜群の社交性と明るさ。興味のあることを追求し、研究する姿勢は、小学三年生で小規模校に転校してから発揮された。マンガに興味をもち、手のデッサンを

したり、某アニメをもとに、級友と役を分担して演劇さながらの遊びをしたり。一輪車や長縄跳びなどで運動能力も鍛えられ、後に札幌に転校した時もスキーに役立った。これこそ神が与えた賜物だと思うのは、よく響く声である。子ども聖歌隊で指導を受けた経験は、今も教会で賛美のリードをするなど用いられている。

大人になった次女から子供時代を振り返る話を聞くと、親が思うよりも色々なことを深く考えていたのだ、と驚く。感覚的に生きているようでいて、思索的でもあるのだ。豊かに与えられた神の恵みがこれからも実るように、祈り続けたい。

末っ子の長男。優しく穏やかな性格である。姉達の送迎のお供が多く、入園前の親子クラスとリトミックが貴重な自分だけの時間だった。親子クラス終了後は、飽きるまで会場を走り回っていた。リトミックのレッスンでは、音楽の中に生きる体験をし、十五歳の最後の発表会ではリコーダーで自作の曲を演奏した。今も音楽が好きである。

小学二年生の九月から二年半を札幌で過ごした。小規模校から、初めてやや大きい集団に入り、戸惑いつつも、また関東に戻る時は帰りがたくない、と言った。

中学では、部活や委員会、合唱祭での指揮など、勤勉、忠実に取り組んだ。先輩の事故、最後の運動会での骨折など、祈ることしかできない経験もした。まず、神の前に謙（へりくだ）る、その姿勢を忘れずに生きていつてほしい。

七、機嫌良く

「ご機嫌さんやねえ」

生まれ育った大阪では、赤ちゃんがにこにこしていると、それを見た人がよくそのように言っていた。

人がこの世に生を受けた時、その前には無数の道が広がっている。しかし、誰のもとに生まれ、どんな環境から人生を始めるか、自分では決められない。

私は、物心がついた時には、日本の、そして大阪のアパートで両親と弟と一緒に暮らしていた。初めての集団生活は幼稚園。家の近くに仏教系幼稚園があるのに、わざわざ隣のキリスト教の幼稚園に入った、というか、母に入れられた。今思えば、まずここが大きな分かれ道だった。神の存在が自然に受け入れられるものとなったからである。

中学生になって教会に誘われた時は、行ってみる、という選択をし、洗礼も受けた。私立のキリスト教主義の女子高には強く願って進学した。しかし、いくら願ってもその道が開かれないこともある。入学式で、

「皆さんは、自分でこの学校に来たと思っているかもしれませんが、神に選ばれて入学してきたのです」

と聞いた。日々の礼拝は、神の前に静まる大切な時間だった。

選択の余地のない道もあった。突然の母の死。四年制大学への現役での進学の話は閉ざされた。険しい道だったが、その道は短大進学、幼稚園就職へとつながっていた。

結婚はどうだろうか。生まれ育った環境が違い、人の紹介で出会った二人である。自分の感情はいつ変わるかわからない。私達は、この結婚は神の導きなのか、互いに聖書を読み日々祈った。結婚に関する本も、同じものを読んだ。少しずつ開かれていく道を見て、これは神が開かれる道だと信じて進んだ。結婚式では、「その土台とはイエス・キリストです」と記した手作りのしおりを記念品とした。

私は、ずっと関西に住むと信じて疑わなかったが、晴天の霹靂のように関東で暮らす道が現れた。さらに北海道へ。不安はあったが、教会に行けば何とかなる、と思えたのはありがたかった。実際に、生活や子育てでも助けを得た。悩んでいる時は、祈って支えてくれる信仰の友がいた。

今後、どのような道が開かれるだろうか。人生の終盤に、思いがけない道が待っているかもしれないが、いつか、この世の生を終えることだけは決まっている。それは天国へ続く道である。それまで「ご機嫌さん」で生きていきたい。

愛唱聖句（新改訳第二版）

*第一コリント一〇章三一節

こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。

*ルカ一章三七節

神にとって不可能なことは一つもありません。

*第一ヨハネ四章一〇節

私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

愛唱賛美歌

*聖歌五九〇番　　すくいぬしイエスと

*聖歌五〇八番　　うきよのかぜと